

子どものケンカを「発達の視点」で捉える

滝 たき 充 みつる
国立教育政策研究所総括研究官

「教育」とは何か。文字通り考えるなら、対象となる相手（たとえば、子ども）を、（たとえば、大人が）教え、育てる、ということである。では、この文脈で「育てる」とは、どういうことか。それは、「発達を支援する」こと、ときに褒め、ときに叱り、対象となる相手が発達するのを支える、ということである。この雑誌の読者のみなさんなら、こうした説明に概ね賛同してくれるに違いない。だが、賛同してくれた、あるいは特段の反対を表明しなかった読者といえども、この表現に込めた私の真意をどれだけ正しく理解できているのだろうか。

このような傲慢ともいえる書き出しで始めたのは、日本各地の教育関係者と接していると、子どもの育ちを支えるというより、むしろ妨害したり阻害したりしているとしたか思えない教師や保護者に会うことが少なくないからである。もちろん、妨害や阻害といっても、危害を加えたり、手抜きをしたりということではない。むしろ、その反対で、子どものために熱心に取り組んでいる、そんな教師や保護者の行為に潜む問題が気になるのである。

熱心な教師や保護者なわけだから、彼らが悪意をもって意識的に妨害・阻害しているというのではないことは、いうまでもない。むしろ、彼らの行為の多くは善意からなされており、営利が絡んでいる場合でさえ、よかれと信じて行っているものと思われる。だが、善意からとか無自覚にとかいったところで、結果的に子どもが発達する機会を奪っているのなら、同じことである。そうした問題を自省できないようなら、子どものケンカについての議論も噛み合うまい。そんなわけで、まずは「教育論」から始めることにしたのである（なお、本稿ではこの雑誌の読者に合わせ、教育の対象となる者を「子ども」、教育を施す者を「大人」「保護者」「教師」のように書き進めることを原則とする）。

「発達を支援する」とは

私は、「育てる」ことを「発達を支援する」こと、と書いた。このようにまわりくどい表現をするのはなぜなのか。多くの場合、とりわけ育てる対象が子どもの場合、彼らの内には「発達しよう」とする潜在的な力がある。それは、植物の種子が自らの内に発芽に必要な養分を備えていて、条件が整えば自ら発芽していくようなものである。だから、「育てる」ということは、何もない白紙の上に文字を書き込んでいくといったイメージの営みとは異なる。私の言う「育てる」、すなわち「発達を支援する」とは、まずは発芽の際に必要な適度な水分と温度を整えていくことにあたる。あくまでも「子どもが育つ」のを大人が支えるというイメージ、子どもを「主体」として捉えたうえで、大人はその補助者になるというものである。その意図を正しく伝えたいため、あえてまわりくどく「発達を支援する」と表現しているのである。



くる。そして、それを適切に考慮することが、「教育」を行う際には求められる。たとえば、高校生よりも小学生のほうが、同じ高校生でも簡単な事柄に取り組む場合よりもむずかしい事柄に取り組む場合のほうが、より専門的な「大人主導」の働きかけが必要になるし、その逆であれば、より多くを子どもに任せた「子ども主体」にできる。そして、最終的に任せきることができるよう「発達の程度」を勘案しながら支援していくことが「教育」なのである。

つまり、「教育」には、まるで正反対のように方向の異なった働きかけ方を、その時々の子どもの「発達の程度」に応じて使い分けていくことが求められる。しかも、厄介なのは、現時点の到達段階だけで「発達の程度」を判断したのでは不十分、という点である。外見上は同じようなレベルであっても、たとえば「発達途上にある子ども」と「発達しなかった大人」とでは扱いが異なる。すなわち、現時点では未熟な状態だが、機会を与えれば「発達の可能性」がある存在には、自力での発達を促すべく、あえて「子ども主体」で任せることも意味がある。一方、既に完成の域にあり、現時点での未熟さは「欠損・欠陥」と判断される存在に対しては、欠けた部分を「大人主導」で矯正したり補償したりするしかない。

「発達」を無視した議論や実践

ところが、近年、そうした「発達の程度」や「発達の可能性」といった「発達の視点」を欠いたまま、「教育」の議論を進める傾向が強くなっている。教育外の専門家に協力を求めることが増える中で、とりわけ子どもの場合には発達を考慮する必要があることに気づかず、大人相手の常識を子どもの世界にそのまま持ち込む例が増えたからであろう。発達途上の子どもが未熟であること、未完成であることは当然なのだが、大人相手の経験は豊富でも子ども相手の経験は乏しいカウンセラーが、大人の基準で子どもを「異常」と診断するようなことが、しばしば起きる。いわば、子どもを「小さな大人扱い」してしまうのである。

他方、子どもが未完成であることは理解できても、「発達の可能性」が念頭にない場合もある。つまり、発達しなかった大人や、発達上の課題を抱えている大人と同じであるかのように受け止め、いわば「病んだ大人扱い」してしまうのである。実体験不足等で育ってきた大人のために開発されたエクササイズやスキル訓練等の手法を学校教育に持ち込もうとする実践などは、その典型例といえる。そこには、少なくとも二つ、検証されるべき点がある。一つは、発達した大人には無害であっても発達途上の子どもにも同じく無害かどうかという「発達の程度」をふまえた検証である。もう一つは、可塑性の低い大人のために開発された疑似体験教材の安易な提供により、実体験の中で子ども自らが試行錯誤する機会を妨げないかという「発達の可能性」に関する検証、すなわち「大人主導」の訓練の導入により、「子ども主体」で実体験する時間（機会）が減ったり、マニュアルで考える癖をつけてしまったりする弊害はないかという検証である。

家庭においてもこのような問題は見られる。「自立させるため」と称してまだ幼い子どもを突き放してみたり、反対に「やさしさ」や「思いやり」という装いのものと、「してあげる」「守ってあげる」と称して子どもが自らの体験を通して学ぶはずの機会を奪ったり、という状況が増えている。「発達の程度」の判断を誤り、「発達の可能性」を無視した状況といえる。

ところで、子どもたちが揉めそうになったり、少しトラブルが起きたりすると、すぐさま「仲よくなるためのゲーム」や「人間関係づくりのエクササイズ」等を行って事態を收拾させたがる大人も増えている。しかし、その多くは、自分の目の前からトラブルを消したいだけ、自分がトラブルを解決させたと思いきみただけの大人のエゴである。子ども自身が問題に向き合うことも、「子ども主体」で解決できる力を育むこともせず、「大人主導」で子どもの目先をそらすだけの取り組みでは、たとえその場は収まっても、問題そのものが解消したわけではないし、自ら問題を解決できる力が子どもに備わったわけでもない。だから、しばらくすれば問題が再燃する。そうなたら再びゲームやエクササイズ、という繰り返して「お茶を濁す」のでは、いつまで経っても「子どもが育つ」ことはない。結局のところ、発達する機会を奪って、問題を先送りしているだけであることに、気づく必要がある。

あるいは、「ケンカにならないためのスキル」や「自分の主張を通しやすくするテクニク」「問題解決の方法」を教えたがる人々もいる。しかし、これとても「発達の程度」と「発達の可能性」を考慮すべきであろう。自分の欲求や相手の欲求にきちんと目を向けることができ、世の中には相容れない欲求が存在することを実感し、ときには理不尽とも思えるような力が行使されることをも理解した後に、問題を大きくしない、問題を事前に回避する等のために何が可能かを考えさせるのでなければ、そこで教え込まれたことを逆手にとり、口先だけが達者であったり、テクニクを悪用したりする子どもが生まれかねない。自他を尊重しているからケンカはしたくないが、それでも起きうる利害対立をうまく解消するためにスキルが必要、と子ども自らが思い至った段階、少なくとも高校段階以上で教えるまでも遅くはない。